

黄金姫

あるいは塔の亡霊

シドウエヤ

アージャシャトラ王の宮廷は深い森に囲まれていた。その奥程に古い塔が在って、暁光の女神ウシャスが祀られている。とはいえ、この塔を建てたのはアージャシャトラ王の父の父を産んだアヌマティ妃であり、いまとなつてはウシャスを祀る司祭もいない有様で、打ちやられてから長い月日が過ぎていた。

だが時折、若い戦士などが面白半分到这里へ覗きに来ることがあった。猿と鳥の楽園と化した塔は、風雨に汚れ、蔦がはびこり、苔むしている。そしてその旧さを証しするものであるかのように、天が太陽を高处に頂くころ、真昼の光の中に亡霊が現れるというのだ。

それは昔の戦士の姿をした美丈夫で、闇色の髪、闇色の瞳をしており、まるで塔を護るように、そのまわりをぐるりと歩くのだという。身にまとう装身具や腰に佩いた剣からすると身分ありげな青年で、王家に縁のある者ではないかと言われていた。

アージャシャトラ王の一の王子であるハリ王子は、兵士たちからその塔の噂を聞いて、常々その亡霊に会ってみたいと思っていた。真夜中の、女神ラトリの裳裾があたりを闇に包んでしまう刻限ならいざ知らず、昼日中の亡霊とは怖ろしくもないものだ。しかし、まだ年若いがれっきとした王太子が、そこいらの兵士と同じように肝試しをするために森の奥へ行くなど、許されるはずもない。森には獣が多く潜むのだ。護兵を十重二十重に連れて行ったところで、アージャシャトラ王はうなずくまい。

十二の歳の秋、ハリ王子は王に従って狩りへ行くことを許された。剣を佩き弓矢を背に、森へと分け入った王子は、いつしかその塔の前へと来ていた。ハリに従っていたカラ將軍は、「こんなところに出ようとは」と呟いた。

「さあ、早く去りましょう、王子。笛吹きや吹く狩りの音からずいぶん離れてしまいました」

「ここはパリクシット王の妃が建てたウシャス女神の塔ではないのか？」

「ええ、その通りです。いまやなにもない古い塔に過ぎません」

「カラ殿、私は前からこの塔の亡霊と会ってみたいと思っていたのだ」

そう言うと、若い王子の言葉に將軍は眉をひそめた。

「そのような愚かな噂に王子が耳を傾けるのですか？」

「私が話を聞いた兵士は、本当に見て来たように語ったよ。カラ殿、あなたは見たことはないのか？」

「ええ、ございません。さあ、王子の姿が見えねば、王はなにかあったかと思われますよ。参りましょう」

無理にも將軍がハリ王子を行かせようとしたとき、亡霊はそこに現れた。はじめ木々の間から漏れる光のいたずらかと思ったのだが、そこには確かに、戦装束の戦士が立っている。顔は青白く、その手足は不自然に透けており、それが生きているものでないことは頭かだった。

丁度、塔の入り口を護るように亡霊は立ち、凝ッと王子を見つめている。

さすがのカラ將軍もこれには驚いたようで、王子を促す手も声も固まった。

亡霊はただ立っているのではなかった。右手は佩いた剣に添えられ、いつでも抜刀することが出来るというようだった。將軍はとっさに王子を背後へとやった。この亡霊が生きている人間になにかをしたという話は聞いたことがないが、こうしてはっきりと視線を受けるとそれもわから

ない気がしたのだ。

しばらく睨み合っていたが、生きている人間もまた亡霊に対して害はなせないとわかったのかどうか、亡霊は塔を巡るように歩き出した。もはや王子たちに興味はないらしく、しかし隙のない動きであたりを眺めやっていた。

なるほど、この塔を護っているようであるというのは本当らしい。

王子は将軍に促され、狩場へと戻った。その道すがら、王子は口を開いた。

「あの亡霊はいったいだれなのだ？ 王家に縁の者ではないかと聞いたことがあるけれど」

将軍も、もはや先程のように言下に亡霊の存在を否定することはなかった。少し迷うそぶりをしてから、こう王子に請け合った。

「私の屋敷にサンニヤーシンと申す者がおります。おそらく城内でもっとも齢を経た翁でしょう。もうすでに百年を生きているといえます。この者ならばなにか知っているやも知れませんが、私が尋ねておきましょう」

数日の後、カラ将軍は、やはりサンニヤーシン翁から話を聞くことが出来たと言上して来た。王子はサンニヤーシンを連れてくるよう言いつけたのだが、あいにく翁は宮廷まで出むくのが難しいらしく、ハリ王子は将軍の口添えで彼の屋敷へとゆくことになった。

カラ将軍の家はこの国でも有数の家柄であり、件のパルクシット王の妃の生家であったはずである。その家に仕える翁ならば、妃の建てた塔にまつわる亡霊について知っていておかしくないだろう。

サンニヤーシン翁は百年を生きているというが、さもあらん、長い白髪と髭に、皺だらけの手をしていた。しかし老いたとはいえかくしゃくとしたもので、王宮に出むけないというのは偽りではなからうか、神妙な顔のカラ将軍を横目に王子はそう思った。

さて、王子がサンニヤーシン翁に「ウシャス女神の塔に出る亡霊を知っているのか」と尋ねると、髭を揺らして翁はうなずいた。

「あれはパルクシット王の御世、大臣のご子息であらせられたソルマ殿でございます」

「.....聞いたことのない人だ」

「そうでしょう、あの亡霊のお姿からもわかるとおり、若くして亡くなりました。ソルマ殿が唯一のお子であった大臣も後を追うように病で身罷りましたゆえ、いまではその血筋も残されておりません。ですが、パルクシット王の一の姫であった黄金姫の恋人であり、猛き将軍として、当時の城内で知らぬものはおりませんでしたでしょう」

「なぜそのような人が、亡霊と成り滙ててあの森をさまよっているのだ？」

「さて、それがわざわざ王子にご足労をいただいたわけとなります。というのも、ソルマ殿の死後、二度とその名を出すことはまかりならぬというのがパルクシット王の仰せだったからでございます。よもやあの頃のことを憶えているものがわたくし以外にいるとも思われませぬが、パルクシット王の禁令はいまもなお解かれてはおりませぬ。それゆえ、宮廷でソルマ殿のお話をさせていただくわけには参りませんでした」

サンニヤーシンは王子を呼びつけた非礼をそう詫びた。

「つまりソルマ殿はなにか忌まわしい死に方をしたというのか」

「さようでございます」

頷いて、サンニヤーシンはさらに話を続けた。

パルクシット王の御世、妾腹の姫ではございましたが、黄金姫と呼ばれるそれは美しい姫君がおりました。黄金のように美しく輝く肌からそう呼ばれるようになった姫君でございます。歌えば迦陵頻伽（カラヴィンカ）の集いも色褪せようかというほど美しい旋律を紡ぎ、舞えばその袖からは黄金がまきちらされるように見えたものでございました。身分の低いお妃を母にもったものの、パルクシット王の溺愛もひとかたではなく、黄金姫の夫は国一番の勇士でなければならぬとつねづねおっしゃっておりました。

さて、そのころ、この王国はまだ小さく、領土も柳那（ヤムナー）河までしかございませんでした。頻りに河を越えて隣国が攻め入り、ソルマ殿はその戦で敵兵を退け、数々の武勲をあげてらっしゃいました。まだ若く、武芸のみならず学芸にも秀で、聖典（ヴェーダ）をひもといてかのナーガルジュナと議論をされることもございました。また、稀に見る美しい方で、国中の娘たちがソルマ殿のお姿を一度でいいから拝見したいと望んでいたのも不思議ではございません。

そういうわけで、このソルマ殿が黄金姫ののちの夫にと選ばれたのでございます。ソルマ殿とお父君のご権勢は並ぶものもなく、だれもいまのソルマ殿のお姿など想像もされなかったでしょう。

それからしばらくのことでございます。いよいよ隣国との大きな戦が始まり、パルクシット王自らをはじめ、多くの方が戦地へと行かれることとなりました。戦の勝利を祈願して、パルクシット王の第一妃でございましたアヌマティ妃があのおウシャス女神の塔を建立されました。

さて、奇妙なことはそれからでございます。王とソルマ殿が戦地にゆかれている間に黄金姫が行方をくらましたのです。いったいどんなわけで姿を消したのかと、これには王もソルマ殿も驚かれたのでございますが、お二人は厳しい戦いを指揮する身でございましたから、黄金姫の消息を求めて宮廷に戻ることに出来なかったのでございます。戦はそれから半年ばかりも続きましたでしょうか。ウシャス女神のご加護あってか、隣国を退け、かの国の王族を滅ぼしてパルクシット王とソルマ殿はこの城へと戻っていらっしゃいました。

戻られたお二人が一番にされたことは、もちろん、黄金姫の消息を求めることでもございました。しかし、いっかな黄金姫の行方は知れませんでした。業を煮やされたパルクシット王は、神官に神の意を乞うよう命じました。しかしウシャス女神の神託は次のような言葉を伝えて来たのです。「悪竜（ヴリトラ）はソルマであり、悪竜は国を滅ぼす」がその言葉でもございました。

ソルマ殿は我が身の潔白を訴えられました。パルクシット王も、ともに戦地で戦っていたソルマ殿に、黄金姫をかどわかすようなことが出来るとは思えなかったのでございますが、神託が間違えることも考えにくいことでもございます。そこで、王は決闘裁判をとりおこなうことにされました。

一方にアヌマティ妃の弟君であるラーム殿をたて、ソルマ殿とラーム殿、お二人の試合によっ

てどちらが正しいかを決めようとされたのです。即ち、ソルマ殿が勝てばその潔白が認められ、ラム殿が勝てば神託が正しいことになるのでございます。

この試合は件のウシャス女神を祀った塔の前で執り行われることになりました。

パリクシット王やアヌマティ妃をはじめ、多くの人々がこの試合のために塔へと集まりました。ところがそこで怖ろしいことが起こったのでございます。いまにも試合をはじめようと剣を抜いたお二人であったのですが、突如、塔の一隅が崩れ、塔に刻まれたビシャルヴァーナ神像の持っていた槍が、あっという間にソルマ殿の体を串刺しにしたのです。ソルマ殿は最後に黄金姫の名を呼んで命果てたと言われております。

これで、試合するまでもなく神がその罪を証しされたのだらうということになりました。ソルマ殿の名は二度とこの王城で口にしてはならないこととなりました。その後、ソルマ殿のお家がどうなったかは、すでに申し上げた通りでございます。

ソルマ殿の亡霊があつた塔に現れるようになったのはパリクシット王が亡くなった後でございました。崇りを畏れて近づく者はなくなり、いまや塔も森の奥で忘れ去られているのでございます。

サンニヤーシンの話を聞き終え、ハリ王子は口を開いた。

「黄金姫の行方はわからずじまいだったのか」

「はい、戦功を獲るため、ソルマ殿が黄金姫の命を神々に捧げたのではないかという噂でございましたが、実のところはわかりません」

塔で出会った亡霊は、険しい目つきではあつたが悪竜の名はそぐわない。どちらかといえば謹厳実直な武人らしい潔癖さがうかがえたように思う。あの塔の周りをさまよっているのは、そこで命を落としたからだというのだろうか。

屋敷を去るときに、ハリ王子は將軍に願った。

「またあの塔へ行きたいのだが、カラ殿、あなたがついて来てくれれば父王も否とは言まい」

しかし今度ばかりは將軍は厳しい顔をして、王子を見た。

「王子、なにせよあれは過去の幻に過ぎません。あなたがお興味を抱かれるのも無理ないものではございますが、そのようなことよりもされるべきことがおありでしょう」

有無を言わせぬ言葉に、王子は言い返すことが出来なかった。確かに、あの亡霊はなにをすることもない。ただあの塔の前をさまようだけなのだ。話は聞いたが、既に過去のことであり、ハリ王子になにかが出来るわけでもない。

カラ將軍の言葉はもつともであつて、王子もものめずらしいものを見たというだけで忘れることにしようと心に決めたのだつた。

それより数年後、王宮で一人の男が死ぬ事件があった。それは廷臣の子息の一人で、ハリ王子とは日頃から懇意にしていた青年だった。彼は死んだ夜も、王子と外交についての話をし、酒を飲んでいて、夜も更け、酔った様子で、王宮内に与えられた房へと戻っていく後姿が、王子が見た彼の最後の姿だった。

翌朝、彼の訃報を耳にした王子はあることを思い出した。昨晩は王子自身も酩酊していたせいであまり考えなかったのだが、去って行く彼の背を追うように、金色の光を帯びた人影が歩いていたように思ったのだ。いまさらながらあれが彼の異変の前触れだったのではないかと思うものの、妖異なことを簡単に口には出せない。

友人は殺害された様子はなく、眠るように死んでいたのだということだった。あれほど元気な方だったが病気だったのか、と人々は噂した。そしてそのあと、「なんにせよ、姫君の夫として撰ばれる前でよかったではないか」そう続けた。

ハリ王子の同腹の妹と連れそうことになる夫は、近いうちに決められるはずだったのだ。候補の一人が死んだ青年であり、いま一人は、あのカラ將軍だった。青年が死んだことによって、カラ將軍が妹姫を娶ることはほぼ決まりだった。カラ將軍と妹姫とはいささか歳が離れているものの、それは珍しいことではない。しばらくして、やはりカラ將軍が妹姫の夫となることが定められた。

ハリ王子が金色の光の夢を見るようになったのは、その頃からだった。その光の夢を見て、息苦しく目を覚ますと、暗い夜闇の中を黄金の光が漂っているように視覚に残った。青黒い闇に包まれたはずの時刻に、あたりが金色ににじんだように見える。

そんな日が続くと、ハリ王子は友人の死の夜に見た光を思い出さずにはいられなかった。あの光はなんだったのだろう。あれが彼の死を示すものだとしたら、夜毎に訪れる金色の夢も、王子の死を示しているように思えた。

病など少しも心当たりはなかったが、寝苦しい夜が続いているせいで体調が優れなかった。さすがに気になり、薬師の元を訪れたが、はかばかしい返事をもらえなかった。

「雨季になるとだれでも体の調子が狂うものでございます。お気になさりませぬよう、申し上げます」

薬師はそう言うものの、夜毎おとずれる金色の夢から逃れることは出来なかった。そのうえ、真夜中に金色の夢を見て苦しく眼を見開くと、以前から見えるその黄金の残滓は次第に濃くなってゆく。寝汗に濡れ、心臓の鼓動が激しく脈打っていた。目覚めているはずなのに、黄金の闇が王子の視界で揺れる。その黄金色の揺動は、まるでウシャス女神の舞のようであった。天上でも類稀なる舞手であるウシャス女神の、衣を翻す舞のようだ。

気力を養う薬を処方してもらっても、なにも変わらなかった。むしろ、目を覚ますごとに身体が重くなり、心は金色の光と裏腹に暗く翳ってゆく。

黄金の闇をまとめて舞うウシャス女神の衣の幻影もまた、濃くなって行く。ハリ王子は女神が彼の心臓の上で舞っているのを感じていた。女神が足を踏みならずごとに、胸から飛び出しそうなほど鼓動が脈打つのがわかる。

これはただごとではない、日を追うにつれ、王子にはその確信が強まった。この光がなんに

せよ、このままでは自分が近いうちに死ぬだろうという予感がした。毎夜、目覚めては金色の光に悶え苦しみ、気づけばまたうつらうつらとした眠りに絡めとられてゆく。押し潰されたような胸の痛みに、ある夜、ハリ王子は咳きこんだ。口元を押さえた掌にべったりと血がはりつき、彼はなにものかにとりつかれたおのれを呪った。

さすがに血を見た衝撃は激しく、王子は苦悶しながら金色の光をねめつける。たとえもうこの身が手遅れだとしても、この光がなにかを知らねば気がすまない。この夜ばかりは、うつらうつらと浅い眠りに溺れることもなく、王子は寝台の上に仰臥し、幻影の正体を見ようと眼を睜いていた。

やがて、舞う黄金の光がふと遠のいた。部屋の外へと出て行くその光は、確かにかつて王子の友人の死の夜に見たものとまったく同じだと王子は気づいた。いままでは漠然と舞う女神の裳裾のようだと感じていたが、それは人の姿をしているようにはっきりと見えた。すらりとした姿の女だ。華やかな衣装をまとっている。ハリ王子には後姿しか見る事が出来ず、容貌はわからなかったが、ひどく優美な姿だった。彼女はまことのウシャス女神かもしれないと王子は思う。だが、いまは真夜中だ。ウシャス女神は暁を支配する。――

王子は決意して、苦しい身体を起こした。そしてよろめく足取りで、その黄金の女を追い始める。追ってどうなるものかもわからないが、追うしか手がかりがない。

王子は怪しげな光に導かれて、闇夜の王宮を歩いた。いつしか廷臣たちに与えられている房のあたりへと来た王子は、追っていた黄金の光が掻き消えてしまったので慌てて見回した。夜も遅いので、起きている者の気配はない。だが、通りがかった中庭のむかいにゆらゆらと揺れる火を見て、とっさにそちらへと足をむけた。その一帯は、ハリ王子の妹姫の夫と決まったカラ將軍の家に与えられている。王子といえど、みだりに足を踏み入れられる場所ではないのでどの房にだれがいるかまでは知らない。とんだ無礼になるかもしれないが、王子は朦朧とした意識で紗をめぐり、房へと飛びこんだ。

部屋には揺らいでいる燭の火しか見当たらない。あの黄金の光はどこへ行ったのだろうと思いながら、堪え切れずに王子は膝を折った。咳きこまずとも、臓腑を這い登って口の中に血が溢れている。

「……王子？」

その声ハリ王子はかすかに顔を上げた。夜着姿のカラ將軍をそこに認めて、彼ならばこんなことをしても許してくれるだろうと王子は安堵した。視界に金色の光がちらつき、やがて王子は意識をなくして倒れこんだ。

苦しさに王子は呻いていた。体中が軋むように痛み、一瞬ごとに頭蓋を殴打されるような頭痛に襲われていた。口の中には血の味が溢れ、吐き気がこみ上げてくる。ひどく苦しい姿勢なのだが、楽な姿勢になろうにもどうしてもうまくいかない。身体に力が入らない。腹部を強く押されているようだった。

その上ひどく揺さぶられている。その激しい衝撃は、規則正しく王子の身体を苛んだ。これを止めるためなら目を抉って与えても構わないと彼は思った。

ふとした瞬間に、王子は自分の置かれている状況に気づいた。身体の下が暖かい。そして激しく揺れている。うっすらと開けた目には、凄まじい速さで動く大地が見えた。

王子は馬に乗せられているのだ。手足は馬の鞍に結びつけられているようで、乗り手の身体のうしろにうつ伏せてくくりつけられていた。激しい揺れは、馬が駆けているためだった。

一体なぜこんな状態に陥ったのか、王子はわからなかった。どこかへ連れて行かれるのだろうが、身体の激しい苦痛に叫びたいほどだった。

馬は、森の中を駆けていた。あたりは朝の色に照らされているが、まだ暑くはなっていない。ハリ王子は馬の背で、何度か吐いた。それはひたすら赤く、王子自身にさえ、どこから溢れたものかわからなかった。

やがて、馬が止まった。馬を御していた人物は、降りると王子の手足を縛っていた縄を取り除き、あまり丁寧とはいえない仕草でハリ王子を馬から下ろした。抱えあげられ、王子はそれがだれかを知った。じきに王子の妹の夫となる男だった。

苦しげに王子が唇を震わせているのを見て、カラ將軍は王子が意識を戻しているのに気づいたようだった。しかし、なにも言わず彼は歩き出した。その頃には、眩しいほどの陽光が森を照らしていた。ハリ王子は、青く澄んだ空を見あげ、その青さの中に聳え立つ旧いウシャス女神の塔を認めた。

カラ將軍は王子を抱いたまま、その塔へと足を踏み入れた。塔の中は暗かったが、將軍は迷うことのない足取りでウシャス女神の祭壇へとむかい、その祭壇に王子を下ろした。ハリ王子は咳きこんで、また吐血した。

「どうして、こんな場所に――」

発作がおさまると、ハリ王子はそれを問うた。カラ將軍は祭壇に捧げられた燭台に油を流し、火をつけた。わずかな赤い光がカラ將軍の冷たい顔を照らし出す。

「王子に私の部屋で死なれては、困りますので」

「どういうことだ、カラ殿。なぜ私をこんなところに連れて来たのだ。苦しい、頼むから、早く王宮に連れ戻してくれないか」

すがるように王子は將軍に懇願した。だが、彼がそうしないことをハリ王子も承知していた。「私が王子を連れ出したことは、だれにも見咎められてはおりません。あなたがここにいることは、だれにもわからないでしょう」

「カラ殿、私はあなたの部屋で、あなたが手にしていた匣を見た。それは、私の部屋に夜毎おとずれては苦しめた黄金の光と同じ色に輝いていた。私をこうして苦しめるものの正体を、あなたは知っているのだろう」

「ご覧になっていたのですか、王子」

「ああ、見たとも。そして私の友人が死んだ夜にも、私はあの光を見たのだ。あれをなんだと言うのだ！」

カラ將軍は、かすかな光の中で視線を反らした。

「あれがなにかは、王子、あなたもご存知です。この塔に縁のある方と言え、思い出されるものではありませんか」

かつてカラ将軍とともにここで見た亡霊のことは、過去の残滓であるとしても忘れようがない。ましてやそれが英雄の呼び名も高い誉れ高い青年だったという話を聞いて、ずいぶんと哀れな思いを掻き立てられたものだ。

王子はこの塔のことを言われ、亡霊であった戦士ソルマとその恋人の名を思い出したときようやく、カラ将軍が示唆したことに思い当たった。美しい黄金の光に満たされたあのあやかしは、その名の通りソルマの恋人であった黄金姫ではないのか。あの戦士が亡霊としてこの時代まで永らえているのなら、黄金姫もそうであったとておかしくはない。

「黄金姫……？」

「ええ、あの方です」

「どうして」

サンニヤーシン翁の話では、行方をくらました黄金姫の消息はついにわからぬままだったのではないのか。

「なぜあれが黄金姫なのだ。あれは亡霊なのか？」

「王子、ご存知とは思いますが、この塔を建立したアヌマティ妃は私の家の者でした。そして、サンニヤーシンはただひとり、その当時を知っているのです。私は王子より先に、サンニヤーシンより話を聞きました。王子にお話したことはすべてではありません。なにしろ、サンニヤーシンは黄金姫の行方すら知っていたのですから。そしてサンニヤーシンは、かつてこの塔の司祭でございました」

「ウシャス女神の、司祭であったのか」

「ここがウシャス女神の塔であったことが一度でもあればの話ですが。王子、この塔でなにが行われたか、想像が出来ますでしょうか？ この塔はアヌマティ妃が邪法を執り行うために建てられた塔なのです。その法力の力があって、件の戦いでパルクシット王は勝利されました。王子が昨夜ご覧になった匣は、その力を制御するためのものです。アヌマティ妃の亡き後、長らくこの塔で眠っていたのですが、サンニヤーシンに話を聞き私はこれを手にしました。黄金姫は、それでああなたのご友人を殺し、そしていまあなたを殺そうとしております」

「黄金姫？」

「はい、アヌマティ妃は黄金姫を殺し、その魂をもって力と為したのでございます。釘づけした舟に黄金姫を閉じこめ、柳那河へと流したそうです。海に至るまでに死した姫の魂魄は、呪法によってこの匣に納められているのですよ」

「……なんということを……！」

王子はその残酷さに顔を顰めた。だがすぐに、自分もまたその力のもとに殺されようとしていることに気づいて悔しがった。カラ将軍が王子を殺そうとする理由はたったひとつだ。アージャシャトラ王にとって王子はハリ王子一人ではないが、みな身分が低い。妹姫の夫となる将軍が王位を継ぐことは十分にありえるのだ。

カラ将軍は火を吹き消した。暗闇に落ちた祭壇から無情に踵を返す。

王子は、将軍の姿が出て行くのを見送りつつ、苦しい息を殺して立ち上がった。

彼が剣でハリ王子の息の根を止めることはしないだろうことはわかっていた。剣で殺せば、そ

のあとが残る。だが、それでは当たり前のようにカラ将軍が疑われるのだろうから、こうして黄金姫の呪われた力を用いてハリ王子を殺そうとしているのだ。

ここへは滅多に人など来ない。置いていかれば、カラ将軍の望みどおりになることは間違いなかった。

嗜血しながら王子は塔を出た。カラ将軍はまだそこにいた。馬にこびりついた王子の血を拭わずに王宮に戻ることは出来ないから、馬を清めていたようだった。ハリ王子が現れて、カラ将軍はとうとう苛立ったように立ち上がって腰の剣を抜いた。

「ウシャス女神に呪われるがいい……！」

そう言って王子は膝をついた。カラ将軍は、剣を手に王子に歩み寄る。

「ウシャス女神が罰するならば、わが家はとうに絶えておきましょう」

そのとき、王子が幼かった日に将軍とともに塔へ迷いこんだときと同じことが起こった。中天にある太陽の光がきらめき、その陽光の中にかすれた姿の亡霊が現れたのだ。立派な戦装束に身を包み、腰に剣を佩いた戦士ソルマだった。亡霊だったから、過去に見たときから少しも老いていない。

王子は咳きこみ、血に濡れた手でただ亡霊に助けを求めた。亡霊になにができるはずもないが、この場で王子の縋るものはその亡霊しかないのだった。

亡霊もまた、剣を抜いた。

カラ将軍は戸惑ったように亡霊を見ている。黄金姫の恋人であった戦士が姿を現すには、偶然が過ぎた。だがそれは亡霊だ。亡霊が剣を振りかぶると、カラ将軍はそれを見あげたが剣を構えなかった。

次の瞬間には、カラ将軍の苦痛の声が王子の耳に届いた。王子が見ると、亡霊の剣で切られたカラ将軍が、驚愕した顔で立ち尽くしている姿が見えた。

二撃目は、カラ将軍も剣で応えた。亡霊は凄まじい勢いで剣をふりおろし、カラ将軍を攻める。カラ将軍はおののきつつも、決して劣ることなく戦った。

それはさながら、かつてこの塔の前で執り行われるはずであった神明裁判の再現であった。悪竜であると預言を受けた戦士ソルマと、アヌマティ妃の弟、ラームが戦うはずだった裁判は、始まる前に塔のビシャルヴァーナ神像が持っていた槍にソルマが貫かれ、行われなかったのだ。その再現をしているカラ将軍は、ラームの曾孫に当たるはずだった。

決着は亡霊が生ある戦士からその生を奪うことのでついた。

ソルマの剣がカラ将軍の胸を抉り、命を絶ったあとにもう一度ふりおろされた。その剣は、カラ将軍がしまっていた黄金姫の小匣を壊したのだった。

亡霊に命を救われた王子は、馬に乗ってどうにか王宮に戻った。一時は命も危うかったが、半年かけて身体を回復し、以前と変わらぬ生活を送ることが出来るようになった。

カラ將軍の死は、しばらく明らかにならなかったが、ウシャス女神の塔に例によって肝試しに行った若い戦士が見つめて、王宮に報せた。亡霊を見に行くと思わぬ恐ろしいものに巡り合ったというわけだ。

獣に食い荒らされてだれかも定かではなかったが、遺骸の身につけていたものから、それが姿を消していたカラ將軍であるとわかり、遠乗りに出たところを賊に襲われたに違いないということになった。ハリ王子の妹姫は、まだ若く壮健だった將軍が亡くなったことをいたく嘆いた。不幸なことに、妹姫は求婚した若者に死を招くという心無い噂を立てられたために、遠く西の国に嫁いで行くことになった。

ハリ王子は、ほとぼりの冷めた頃にカラ將軍の家へと使いを送り、サンニヤーシン翁を王宮へと呼んだ。罪を懼れて来ないやも知れぬと王子は思っていたが、以前に会ったときから遙かに年老いたサンニヤーシンは、輿に担がれて王子を訪ねて来た。

翁はそのような姿で王子に会うことを詫びたが、王子は構わなかった。

「私が呼んだのだ、それを気にすることはない」

「あなたさまがお聞きになりたいことはよく知っております」

「今日は、パリクシット王の禁令が未だに生きているなどとは言わせない。嘘偽りなく、あなたの知っている、あの塔にまつわることをすべてを話してほしい」

サンニヤーシンはすっかり観念したように、あの塔であったことを話し出した。それはカラ將軍が言っていた通りであった。アヌマティ妃によって黄金姫は舟に籠められ、川に流された。乾いて死んだその魂は、サンニヤーシンの行った呪法によって、あの匣に宿っていた。匣の持ち主の望むままに、黄金姫はその魂魄を従わせていたのだという。

ハリ王子は、それを聞いて深い嘆きを覚え、厳しい口調で、老人を糾弾した。

「おまえはその手で罪のない黄金姫を殺し、そして黄金姫の力でもって幾多の人間をも殺した！

その罪が許されざるものであることは承知しているだろう。長い時を経て老いさらばえてもなお、おまえがこの世に残っているのは、こうして事を明らかにして罰せよというウシャス女神のお示しに違いない。遙か過去の罪であったとしても、私はそれを許さない。カラ將軍は黄金姫の魂魄を辱めてその代償を払った。おまえもその代償を払うがよかろう。あの哀れにも亡霊となってさまよったソルマ殿のためにも！」

王子は老人を生きたまま獣に裂かれる刑にかけることを命じた。サンニヤーシン翁はそれに不満の声を上げるでもなく、うなだれただけであった。

だが、老人は部屋を連れ出されるたびに再び口を開いた。

「王子、ただ最後に申し上げておきたいのは、黄金姫はあのようにして呪われた身となることを承知されていたということでございます」

「なにを言うのだ。そんなことを承知する人がいるはずがないだろう」

「いいえ、そうではないのです。黄金姫は、姫君としてこの国を深く愛しておられました。そして、かの戦いでこの国が決して優位でないということも知っておられました。

アヌマティ妃が国のためのあの邪法を執り行うと決めたとき、黄金姫もそれをご存知でした。ソルマ殿は黄金姫から話を聞き、戦地へさらってでも姫をとめない、そのような目にあわせないように願われました。しかし、当の黄金姫がそれを拒んだのです。姫は、この国に残れば魂を捕られることをわかっていて、この王宮に残られたのでございます。

それに、ソルマ殿がああして陥れられたことをおかしいとお思いになりませんか。アヌマティ妃は、ソルマ殿に罪を被せるようなことはなにひとつなさりませんでした。ソルマ殿を悪竜だと非難した言葉は間違いなく神託だったのでございます。それが本当のウシャス女神であるとは私は思いませぬ。塔の前で行われた神明裁判にしても、それはソルマ殿とラーム殿の間で公正に行われるはずのものでした。ビシャルヴァーナ神から槍を奪い、ソルマ殿を殺すことができるのは、黄金姫をおいて他におりましようか！

黄金姫は、ソルマ殿と深く愛し合われておりました。ですが、それよりも姫はこの国を護られたのでございます」

ハリ王子はそれを聞いて、亡霊だったソルマを痛ましく思った。

「それでソルマ殿は亡霊となってあの塔の前をさまよっていたのか」

「はい。おそらく、なんとしてでも黄金姫の魂を軛より解き放ちたかったのでございましょう。哀れな方でございます」

その言葉に偽りはなかった。

しかし、もはやウシャス女神の塔に亡霊は出ない。黄金姫を呪われた境遇から解き放つという願いを果たして、彼もまた解き放たれたのだ。いずれあの塔は、亡霊ですら守る者もなく、崩れ落ちてゆくことだろう。戦士ソルマと黄金姫の悲しい物語は、語り継ぐ者もなく、消えてゆくのだ。